離島地域の中学校における地域学習の現状（その２）

――沖縄県与那国町を事例として――

岩田　貢

▶キーワード

離島教育　与那国　久部良中学校　地域学習

▼要　旨

沖縄県八重山郡与那国町は、台湾との国境に臨む離島にある。ここでの地域学習は、他の離島と同様に、地域で学ぶことより地域を学ぶことに傾斜している。その内容をみれば、島の自然・歴史・文化・産業・地域生活等を教材化した学習が展開されている。

与那国におけるこの地域学習を含む離島教育の全体をみれば、島を教材とし、島の中で学び、島の住民によって教えられることを通して、与那国育ちというアイデンティティーを育成することが主眼とされている。与那国では、中学校卒業後には島から離れて自立することが求められており、その後帰島するにせよ離れたまま生活するにせよ、島の振興に寄与する人材の育成が行われている。これらの教育には、同じく国境に接する離島である長崎県対馬との間に違いをみることができる。

１　はじめに

離島は、環海性と隔絶性とで性格付けられる「島しょ」を示す用語である。前者の環海性には自然的要因がみられるが、後者には社会的要因がとりわけ強くはたらいており、これが厳しい環境下での生活を強いる主因となっている。

離島に関する教育は「離島教育」と総称される。離島教育は、離島を学ぶのか離島で学ぶのかなど、明確な定義は見受けられず、一般に「山間部や離島など交通・通信の不便な地域の学校の教育」を意味する「へき地教育」[1)]に含まれている。

本論では、対馬の研究[2]に続き、「離島教育」を、離島における学校教育の内容と方法および実践上の諸課題を主としてとりあげる意味で使用する。したがって、島外からみて離島を学習の対象とする教育や、離島を訪問したり離島を舞台に実施する体験的な学習を行う教育などについては含めない。また本論での地域学習は、中学校社会科における身近な地域を対象とする学習をいうとともに、社会科の内容と有機的に結びつく総合的な学習の時間や学校行事において行われる学習も含めることとする。

さらに本論では、沖縄県八重山郡にある一島一町の与那国を研究対象とし、町立久部良中学校の教育を事例としてとりあげる。手順として、まず離島での教育にみられる特徴を整理し、その後は対馬の研究と同様に進める。すなわち、①与那国の現状、②久部良中学校における教育実践、③実践に関する分析と地域学習の考察という構成とする。

なお、本論では、地名“与那国”に関して、研究対象地域として一般的に指し示す際には「与那国」を、行政区を意識して示す場合には「与那国町」を使用することにする。

2　離島及び離島教育

(1)　離島とその振興

日本の沿岸の「島しょ」をみる際は、「海上保安白書（昭和62年版）」に記載されている6,852島という数値が基になる。島しょを明確に定義するものはないが、同白書には、「島しょとは、外周0.1km以上をいう。」という基準がみられる。他方、離島の数は、本州、北海道、四国、九州及び沖縄本島（以下「本土」と表記）を除く6,847島[3]とされるが、離島の明確な定義はなく、広義にはこの島しょの基準があてられる。

狭義の離島[4]とは、離島振興法（1953年）によって振興対策の対象となっている島をさす。現在、261の有人離島が同法による振興対策実施地域になっている。

離島の振興に関していえば、同法の第５次改正・延長下での2003～2012（平成15～24）年度計画において、「離島の地理的・自然的特性を生かした振興」「地域の創意工夫による自立的発展の促進」という新しい方向性が示された。いわば、離島は今、隔絶性や狭小性といった不利な条件を抱えつつ、本土の社会システムに組み込まれながら、公共投資減少策の中、住民には自立を目指させるという厳しい島づくりが求められているのである。

この中で離島では、住民自身の島への理解の促進と地域の中で活躍できる人材の育成が求められており、学校教育に期待される部分は大きいと言える。

(2)　離島教育とその課題

離島教育に関する研究は、必ずしも多くない。その中で柳田泰典の論考[5]に注目したい。柳田は「離島における地域教育構造の現状と課題」の中で、離島教育を考える基本視座を以下のように整理した。これは1989年度に長崎県五島列島を対象に行った調査を基にしたものである。社会情勢や当該地域のもつ特性が異なり、直ちにすべての離島の分析に適用できるかどうかは検討を要するが、現在の離島教育の内容をみる視点について重要な示唆が読み取れる。

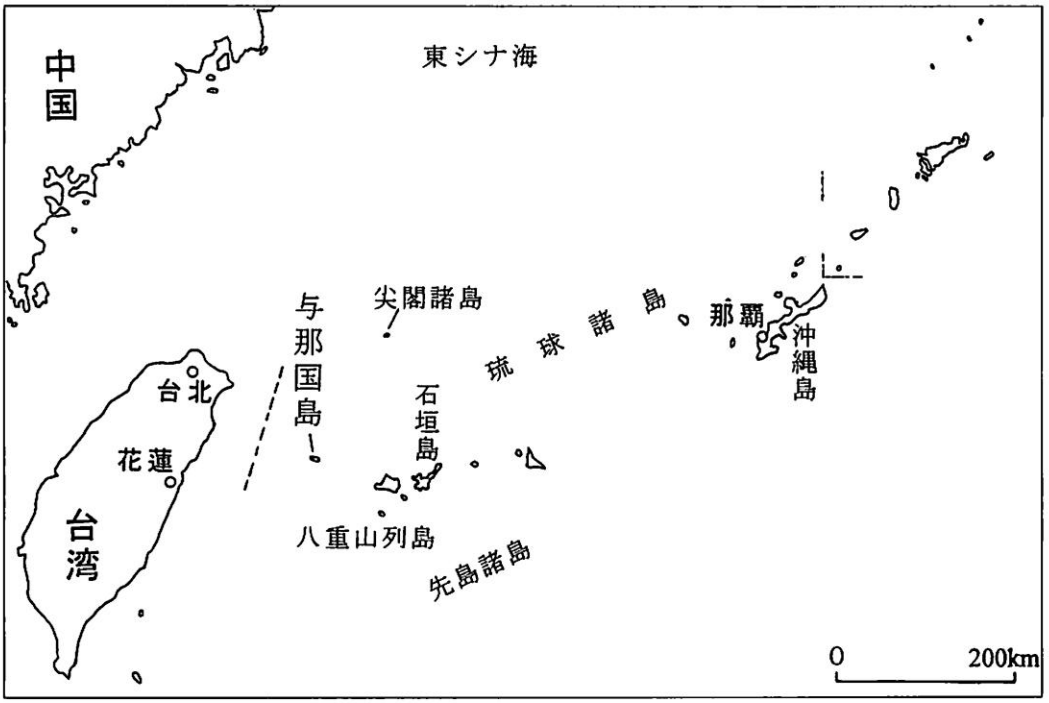


図1 与那国島の位置

①「本土」への移動（地域からの離脱）が、子どもたちの就職、進学行動の基本的な特徴となる。その要因は、農漁業の衰退と全国的な高学歴化の進展にある。

②①の行動の進展は、「現代教育のもつ諸矛盾の離島的拡大・増幅」と捉える必要がある。

③現代教育のもつ諸矛盾の主なものとは、次の四点である。

ア、学校における態度主義的な学力形成と人格形成

イ、受験、進学が要求する諸能力の優先的な形成

ウ、社会的選抜過程の日常化と子どもの「学力」による格差、階層差の形成

エ、教育は学校で行い、それを支える形成は家庭、地域で行うという学校教育中心的な「教育－形成」観

④四点の矛盾は離島で拡大・増幅され、次のような諸形態としてあらわれる。

ア、学校においては、受験競争の圧力や進学への志向が弱い環境にあるため、基礎学力や競争が停滞するいっぽう、精神力が強調されることになる。

イ、家庭においては、経済力や諸施設の不備、文化的集積地との距離の大きさなどから、学習塾や習いごと、文化活動や旅行等の、進学、就職を支える教育が十分できない。それがまた学校教育や地域教育への依存を高め、家庭の教育力を縮小させていく。

ウ、地域においては、固有の「労働－生活－文化」の経験的な技能伝播が後退していく。

エ、本土への移動は、受験、就職に直接必要な準備を教育的諸活動に求め、拡大していく（「直接的準備性」の拡大）。

オ、教育の内容は、学校教育を支える生活態度、道徳的態度、競争心、忍耐力などの過度

な強調となっていく。

カ、遊び、文化、さらには労働－生活の諸技能は、直接的準備とは関わりの薄いものとして軽視されやすく、子どもたちの多面的な能力の形成は不十分なものとなる。

⑤離島教育の発展可能性は、受験、就職への準備の間接性と多面性を拡大していく「間接的準備性」でなくてはならない。これの発展のためには、学校における基礎学力の形成と科学的認識の地域的発展、それにもとづく協同的競争の組織化がまずもって必要となる。家庭、地域はそれぞれにおける教育－形成力の独自な発展に根ざさなくてはならない。

柳田は、「離島教育を考える基本視座」としつつも、社会的諸条件の不備から離島の教育に制限が多いという現状を把握するだけで終わらず、受験、就職への準備を直接的に行うことよりも、地域性や多面性に関わる能力を拡大していくことの重要性を強調している。ただ、ここでは社会的環境に恵まれていない離島に育つ子どもが、なぜ全国的に進行している受験、進学志向からは遠ざけられねばならないのか、なぜ家庭教育や地域の文化を強く意識しなければならないかについては記していない。

いっぽう、猪山勝利[6]は「地域教育の論理と課題」の中で、「地域教育」に関して述べている。この中で、地域教育の定説的概念が成立している訳ではないとしつつ、「地域教育把握の視点」を次のように類型化している。

①地域と教育の遊離型

制度的にも教育実践上でも遊離している状況。地方財政法が教育施設や教職員費の父母・住民負担を禁じた1960年代以降強くなった。

②「地域と教育」地平の部分関連型

a．部分活用型：学校施設の開放や地域行事への学校参加など、教育や地域が相手サイド（相互補完型）の資源を部分的に活用するパターン。初期的地平のパターン。

b．部分協同型：学校行事を父母・住民の運営参加で協同運営したり、地域行事を学校の協同参加によって開催するなどのもの。今日の状況下では先進的なパターン。

③「地域教育」地平の総合関連型

a．総合型：行政の「外発的」誘導政策により、「学社」「学地」連携の名で進められているもの。両者の独自性や自治性を認めず安易な結合を図るため、しばしば形式的な関係に止まるか、住民や教職員の主体的エネルギーを喪失して現実的推進に欠ける場合が多い。

b．総合的結合型：②のｂの発展や③のａの批判的取組により次第に明確化しつつあるパターン。相互の施設開放などの物的資源の連関から人材の相互活用や教育・地域活動の協同運営にいたる総合的なもの。相互の独自性や自治性を前提としたうえで、それぞれが相手への参加を基本として、協同・共同活動を通して連関する。

猪山は、このような地域と連関した教育が求められる背景として、(ア)教育側が学習者の主体化や活力を再生する教育実践の方向を追求し始めていること、(イ)人間の個性や社会共同性の育成と共に産業構造や社会構造の転換状況に主体的、創造的に対処できる人間の育成を志向していること、(ウ)地域おこしなどの地域社会の形成にとっても、個性的、創造的取組が求められて

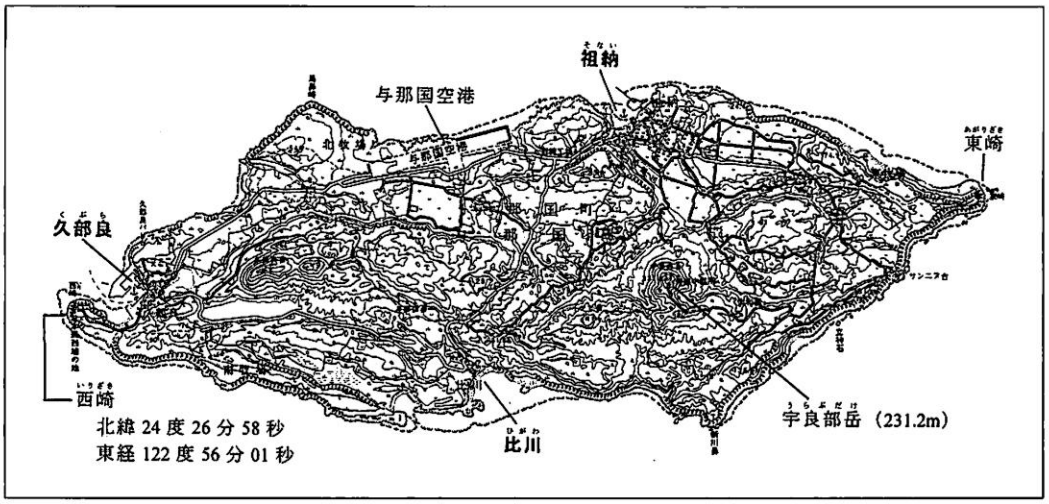


図２ 与那国町（１：50000「与那国島」平成２年修正，54%）

おり、そのリーダーの育成が重要な課題となっていること、の３点をあげている。ただし、ここでは具体的な教育実践を類型化している訳ではない。

3　与那国の特徴

(1)　国境の島

与那国町は、与那国島にある１島１町の地域である。島は、八重山列島の最西端に位置し、その西端にある西崎は、日本の国土領域の最西端に位置することで有名である。八重山列島は石垣市、竹富町及び与那国町の１市２町からなり、同列島は東側の宮古列島と共に先島諸島を構成する。その先島諸島は、東方の沖縄諸島と共に沖縄県全域を含む琉球諸島を構成する（図１）。

与那国島は、長径約11.3km、短径約4.2kmの長い東西軸をもつレンズ状の形態で、最高峰は、宇良部岳の標高231m、面積はわずか28.95k㎡の小さな島である。年間平均気温は23.6℃、年間降水量は約2,260㎜[7]で亜熱帯性の気候を示している。人口は、2011年１月１日現在で1,614人（与那国町調べ）が数えられ、集落は北部の祖納、西部の久部良、南部の比川の３ヶ所で、祖納に町役場がある（図２）。

与那国は14世紀頃から琉球に属するようになり、17世紀の薩摩藩の琉球入り以降はきわめて過酷な支配下におかれた。八重山及び宮古地方は、1879（明治12）年の琉球処分と共に日本に帰属したが、人頭税とよばれる独特の重税は1903（明治36）年の地租改正施行まで続いた。

戦前、日本の支配が及んだ台湾との間には、島から渡航して仕事や学校に赴くなどの生活圏が形成され、島の人口は5,000人規模にもなった。戦後しばらくは台湾との間で密貿易が続けられ、1947（昭和22）年には人口は12,000人にも拡大した。その後の米軍による貿易取締り強化により人口は激減し、1972年の沖縄県の本土復帰時には2,600人となり、現在は最多期の約７分

の１に減っている[8]。

与那国島は、八重山地域における経済・社会の中心地である石垣島からは、約116km離れている。さらに、東京からの距離は直線で2,037kmあり、那覇からでも514km[9]ある。極小の島しょの一つという形態上のみならず、距離的にみても文字通りの絶海の孤島となっている。

いっぽう視点を転ずれば、西方に位置する台湾までは、海上約111kmの距離を数えるばかりである。気象上の条件さえ整えば台湾島が遠望でき、いわゆる“国境の島”となっている。肉眼で外国を見ることができることから、外国との関係や交流に意識は当然高まる。このような条件にある地域は、国内では数少ない。

島の現状については、別稿[10]に詳しいが、以下概略をあげておきたい。

(2) 島の生活

産業については、第二次世界大戦まで、農業では米・糖、漁業では鰹節・鮮魚等の産出があり、副業として養豚もみられた。これらの産物は、石垣や那覇方面、さらには1920年代より台湾との取引が始まると、台北近くの基隆（キールン）まで送られた。

現在の町の主要産業は農業で、サトウキビ栽培や肉用牛飼育が多い。米作もみられ、水田率が約16％と県内では比較的高い。水産業は沿岸漁業が中心で、カジキ類の水揚げが多く、カジキの消費性向を勘案しつつ熊本や金沢、沖縄本島の市場に空輸している。2010年10月現在の町漁協所属の組合員は29名、５トン未満の動力漁船は27隻で、近年減少傾向にある[11]。

観光業では、国内最西端地への訪問や、釣りやダイビングを目的とする来島者が一定数存在する。また飛行機を利用した八重山諸島を巡るツアーもあるが、飛行距離をみれば、羽田－那覇空港間が約1,580km、那覇－与那国間が約510kmという長距離に伴う経費は高額にならざるを得ない。島内の宿泊施設としては、小規模なホテルや民宿が主であったが、近年にはリゾートホテルが営業を開始した。

産業の停滞と人口の流出に伴い、経済の活性化を主とした与那国の振興策が喫緊の課題となっている。

(3) 島の振興策

町の将来構想に関して、2004（平成16）年に八重山３市町村合併の賛否を問う住民投票が実施された。中学生をも含めた投票の結果、70・46％という投票率の下、賛成が327票、反対は607票という大差で、島独自で生きる道が選択された。

町では島の生活・経済の振興のため、政府に対して規制緩和を求める特区の申請を、これまで３度にわたり行ってきた。直近は、2006年提出の「与那国『国境交流特区提案2006』」[12]で、次の３点を柱としていた。

Ⅰ．国際防災協力特区

Ⅱ．国境交流支援・短国際航海安全航行促進特区

Ⅲ．国境離島型開港

いずれも国境を接する台湾との交流を盛んにすることを柱とするものである。このうちⅠは、

東シナ海での地震・津波その他の大規模災害に対処するため、町と姉妹都市関係にある台湾花蓮(ファリエン)市などとの間で国際防災協力に関する取り決めを締結しようとするものである。Ⅱは、与那国島の生活圏を確保する上から、近距離の台湾との国際航路において規制を緩和して、国内航路と同等の条件で就航することを希望するものである。Ⅲは、石垣島に寄港し納税しているクリアランス船の一部を与那国に呼び込んで、税収を図ろうというものである。クリアランスとは通関の意味があり、直接の交易ができない中国・台湾間にあって、外国の港を経由することで実質的に貿易可能にするものである。しかし、2008年5月に中華民国新総統となった馬英九(マ・インチュウ)氏の対中国融和政策により、同船は減少してしまった。

結果として与那国は特区指定には至らなかったが、政府により「地方の元気再生事業」予算は認められ、2008年度には、チャーターした飛行機や船舶で、台湾からの観光客受入の試行を始めた。しかし、台湾からの観光客を安定的に島内に招き物資の輸出入をする段階には至っていない。

これとは別に、人口増とインフラ整備をねらった自衛隊施設誘致の構想があり、島内では直近の町長選や町議選の争点にもなってきた。

4　久部良中学校における離島教育の実践

(1)　久部良中学校について

与那国島の西端に位置し、西崎と久部良漁港を眺望できる高台にある。町内には3つの集落があり、幼稚園3園、小学校3校、中学校2校が設置されている。久部良中学校[13]の2010年度の生徒数は、1年が4人、2年が8人、3年が7人の計19人で、教職員数は12名であり、島内2中学校では規模が小さい方にあたる。

(2)　久部良中学校の教育

ア　教育目標について

同校の校訓は、「世界雄飛」である。ここには、たくましく生き抜く力を身につけ、与那国から世界に羽ばたく創造性・国際性に豊んだ人材の育成を目指すという願いが込められている。また、教育指針には「郷土を愛し世界雄飛の気概に富み、21世紀をたくましく生きる人間の育成」とあり、校訓と相似した内容を含む。その下に4点の「教育目標」が続くが、初めの3点は知育・徳育・体育に関わるもので、次の4点目に地域の特徴が見出される。

「豊かな郷土を愛し、世界へ羽ばたく生徒」（夢：まいふな－久中）

この内容は、我が郷土の豊かさに誇りと自信を持ち、かつ、自立と世界雄飛の気概を持ち努力し続ける久中生の育成ということである。豊かな郷土を愛し、地域の発展を担う地域人材として「夢・希望」の実現に励む生徒の育成を推進する。校訓の「世界雄飛」を中心に据え「まいふな久中生」を育成するとする。「まいふな」とは本来“お利口さん”とか“模範になる”とい

う意味の言葉で、そこからは優れたとか積極的な姿勢というイメージも感じ取ることができる。

イ　総合的な学習の時間について

同中学校における地域の特徴をふまえた教育は、久中プロジェクトを含む「総合的な学習の時間」に顕著にみられる。内容は以下のようであり、全学年ではA～Cを共通に設定している。これらは、年度により配当時間や構成面で若干の相違があるが、資料収集上の制約から、実践内容は複数年のものを併せて採り上げて、その概要を順にみていくことにする。

A）郷土に関する課題解決学習（久中プロジェクト）
B）郷土音楽
C）産業体験（洋上体験・農園活動）
D）学年ごとの取り組み（2年職場体験・修学旅行事前学習、3年教科の深化補充学習等）

A）2010年2月18日に訪問した久部良中学校でのヒアリングによれば、郷土に関する課題解決学習に関するテーマは、年によって「黒糖づくり」であったり「長命草のルーツ」等と設定されるようである。例えば、詳しい記録が明らかな2007年度の取り組みは、次のようであった。

○テーマ：「郷土の自然・文化・産業を知ろう。」～台湾・花蓮市との交流を通して～
○内　容：全学年共通で75時間（2年生は＋25時間、3年生は＋15時間）を以下の単元で取り組む。
○交流学習の取り組み（台湾・花蓮市：全40時間程度）
- 全校生徒を、3つの縦割り小グループ（文化班、自然班、産業班）に編成する。
- 各グループ別に、旅行先の九州について調べるとともに、郷土与那国と比較することによって郷土をより深く理解する。

①台湾について調べよう……
台湾の文化、自然、産業についてグループごとに調査等の学習活動を行う。まとめとしてフォトランゲージなどを行い、知識を共有すると共に、発表力を身に付ける。

②情報を発信しよう……
簡単な中国語を学ぶとともに、平成18年度に取り組んだ、与那国の文化・自然・産業についての調査結果「与那国紹介パンフレット」を中国語訳・英訳し、ホームページにアップする。

③交流学習……
台湾の中学校と、インターネットを利用した交流を図る。また、町とタイアップし、ホームステイなどを通して直接交流する。

B）郷土音楽については、2010年度は全10時間の構成で、以下のような内容であった。

ア　学習する楽器と各メンバーの数を次のようにする。
三線（約13人）、琴（約3人）、笛（約4人）、太鼓（約3人）

イ　体育祭のある年は1曲、文化祭のある年は2曲を練習する。

ウ　地域の方に講師を依頼する。

エ　2010年度は、１学期は週１時間、２学期は週２時間の学習で、９月の校内デイサービス及び、久中プロジェクト発表会を練習成果の公表の場とする。

C）産業体験は同年度全10時間であり、その構成は次のようであった。

ア　農園活動６時間　農園整備、収穫祭

イ　洋上体験４時間

このうちC）イの「洋上体験」は、毎年地元の漁業協同組合の協力を得て、漁船で沖まで行き、カツオやシビの一本釣りを体験する。釣りあげた魚は、自分たちでさばいて刺身にしたり、いろいろな料理にして、漁師さんと共に会食するというものである。例えば、2010年度は、「海の利用・海との闘い、漁獲の感動、勤労の重要性など素朴な感覚を肌で感じる」をねらいとして、以下のような概要で行われた。

日　　時：７月14日13時～18時30分
活動内容：釣り体験、魚さばき、料理実習、会食
協 力 者：久部良地区漁民、久部良漁協、地区保護者
効力内容：漁船の提供、釣り指導等
ね ら い：保護者や漁民の働く姿に触れさせることを通して、将来の職業観を考える機会とする

この年の詳しいデータは明らかではないが、2008年度の実績をみれば、漁船11隻による協力参加の下、２時間の釣り時間が設けられ、293kgの総水揚げがあったという。

ウ　学校行事について

総合的な学習の時間以外でも、個性的で多様な行事への取り組みがある。それらは、同校ウェブページでも紹介されている。

洋上体験学習（上記）

校内デイサービス

地域のお年寄りを学校にお招きし、楽しいレクをしたり、給食を一緒に食べたりします。

海神祭

毎年旧暦の５月４日に行われる海神祭（ハーリー：競漕）。沖縄の漁師町ではどこにもある行事ですが、久部良中学校では、全校生徒が北・中・南の３組に分かれ、中学生ハーリーに参加します。また、開会式・閉会式では、全校生徒で吹奏楽演奏をします。

金刀比羅祭

航海安全、豊漁を祈願する祭りです。香川県の琴平発祥の、県内では珍しい祭りです。毎年、本校及び久部良小学校では、全校児童生徒が参加してパレードと奉納相撲を行っています。

春の遠足

毎年、ダンヌ浜やナーマ浜などの近所の海に歩いて行きます。午前中は釣りをしたり海水浴をしたり、クラスのレクをしたり。午後は全体レクで網引きやビーチバレーを楽しんでいます。

帰り道では、クリーン作戦と銘打って、ゴミ拾いのボランティアをします。

小中合同駅伝大会

おとなりの久部良小学校との合同で行う駅伝大会。中学生がうまく小学生をリードし、協力してたすきをつなぐ姿は感動的です。

吹奏楽定期演奏会

毎年恒例で２学期末に行われる行事。町では数少ない本格的な演奏が聴けるコンサートとあって、毎年多くの人が見に来てくれます。もともとチャリティとしての行事で、入り口で赤い羽根共同募金も募っています。

全国的に小規模な僻地校においては、学校行事がこのように地域との連携の下で行われることは一般的であろう。とりわけ体育大会の開催に取り組みが集約されることが多い。しかしここでは、体育大会は実施されても必ずしも年間最大のイベントにはならない。年間を通して多くの行事が並列されているからである。

エ　学校経営方針における重点化

2008（平成20）年度の学校経営方針における「指導の重点」中の６番目には次のような項目がみられる。

「地域の自然・歴史・文化の重視」～スクールコミュニティづくり～

豊かな自然や伝統文化に恵まれた地域を愛し、地域の歴史・文化を理解するとともに地域発展に貢献する態度を育てる。

①本校「総合的な学習の時間“プロジェクト2008”」の基本テーマとする。

②地域の自然や歴史、文化遺産等の地域素材を積極的に教材化する。

③地域の文化及び伝統の理解、体験的な学習や多様な地域交流活動の促進に努める。

④選択教科において、郷土音楽を取り入れ、個性的で豊かな特色ある学習指導の展開に努める。（地域人材の選択教科積極的活用）

⑤先人の優れた歴史・文化を理解するため、地域行事の体験活動と奉仕協力精神を養い、地域づくりの基礎を培う。

上記のイ・ウであげた総合的な学習の時間や学校行事の内容を重点的に扱うことは、本項目により裏付けされている様子がよくうかがえる。

ここでは、①地域の自然・文化・歴史を学ぶ、②地域の中で学ぶ、③地域と共に学ぶ、という特色がよく現れている。

(3) 久部良中学校における離島教育の推進力

久部良中の教育実践でみられるのは、総合的な学習の時間においては地域を教材化したものであり、学校行事では地域に開かれたものや地域行事の一環として行われるものである。これらは先にあげた、猪山勝利[14]による「地域教育把握の視点」に関する５つの中の「②『地域と教育』地平の部分関連型」に相当するものであろう。例えば、総合的な学習の時間の郷土学習や産業体験、学校行事の校内デイサービス・小中合同駅伝大会及び吹奏楽定期演奏会は、学校を開放したり地域の教育資源を活用することから、「a. 部分活用型（相互補完型）」の試みに当たると考えられる。また、海神祭や金刀比羅祭への参加は、久部良地区の地域行事に参加するもので、「b. 部分協同型」に当たるものであると考えられる。

与那国における学校教育の推進では、地域との連携が最も重要である。連携推進の基となっているのは、町内に５ヶ所設置されている公民館の館長と５つの町立小・中学校の校長とが組織する会合である。このうち与那国の公民館は、地域の伝統的な協同労働組織と慣行を守りつつ、祭祀行事とも結びついた部落組織を基盤として1970年代に作られており、他の地域にはみられない特有の組織となっている[15]。公民館の役割の一つとして「教育・行政への補助活動」があり、教育機関からの青少年学習活動の協力依頼に応えることになっている。地域における人材は限られていることから、地域の組織の協力を得られることで、はじめて学校行事が成立する訳である。

先に、猪山は「③『地域教育』地平の総合関連型」における「b. 総合的結合型」の段階を、学校と地域の連携が最も進展したタイプとして説明している。これまでみてきたように、久部良中学校の教育実践の在り方には、学校と地域との連携に関するいわば究極的な姿がみられる。しかし、猪山が③ｂの説明で示しているように、相互の独自性や自治性を前提としたうえで、それぞれが相手への参加を基本として、協同・共同活動を通して連関しているとは、必ずしも言えないのではないかと思われる。与那国では若干事情が異なるようである。

その背景に中学校の生徒数が約20人と少ないという現実がある。また、校区の久部良地区は人口500人にも満たず、保護者の構成比も小さい。学校は地域に接近して協力を求める以外の選択肢はない。また、地域も学校と協同で行事を進めて活性化を図ることができ、結束力が高まるのである。生徒数と地域人口の少なさが、必然的に協力を求め合うかたちになっているように考えられる。しかも、校区では近年公民館の館長の選出が徐々に難しい状況にあるともいわれている。③ｂにおいては、学校・地域ともにそれぞれが強力な推進エネルギーを必要とする。組織化された中学校は別として、人口が減少しつつある与那国における一地域においては、既存の組織が助けあうことではじめて互いの独自性や自治性を耕すことになっているようにとらえられる。先の(2)エ「学校経営方針における重点化」であげた重点目標中の「スクールコミュニティづくり」という文言からは、地域に期待する学校側からの強いメッセージをくみ取ることができるのである。

改めて、「久中プロジェクト2009」計画中、「郷土与那国・久部良に関することについて」の一部に、次のような内容があることを付記しておこう。

地域としても、子どもは地域・家庭・学校が連携・協力し、みんなで育てるべきだという意識が強く、郷土のことをしっかり学んで欲しいという要望もある。

郷土学習等の学校教育の中にも積極的に地域人材を活用することによって、子どもたちの知・徳・体のバランスのとれた育成が図られるとともに近年強く求められている「開かれた学校」づくりにもつなげていけると考える。

ここでは、地域がこぞって学校教育を応援する背景が読み取れる。子どもは、住民全員で育てるべきだという強い思いである。島内にある居住地域は、他に住民1000人弱の祖納地区と100人余りの比川地区だけである。久部良地区の子どもは地域全体で育てるという意識が高まるのは自然なことである。隔絶性で性格付けられる離島の特徴がここにみられる。離島教育は、このような住民意識の下で実践されているのである。

(4) 久部良中学校の離島教育の特徴

先にあげた柳田泰典の論考[16]によれば、離島教育を考える場合、現代教育のもつ諸矛盾は離島でさらに拡大・増幅されるという。ここでは、柳田が指摘したア～カの諸点の中でも、次の項目との関連が考えられる。

ウ、地域においては、固有の「労働－生活－文化」の経験的な技能伝播が後退していく。

オ、教育の内容は学校教育を支える生活態度、道徳的態度、競争心、忍耐力などの過度な強調となっていく。

カ、遊び、文化、さらには労働－生活の諸技能は、直接的準備とは関わりの薄いものとして軽視されやすく、子どもたちの多面的な能力の形成は不十分なものとなる。

このうち、カについては必ずしも当てはまらないようだ。総合的な学習の時間や学校行事を通じての地域との連携はきわめて密なものがある。農園活動や洋上体験を行ったり、郷土の音楽を学んだり、地域行事の海神祭や金刀比羅祭へ参加したりすることで、生業も音楽や踊りの文化も次の世代に伝えられていくしくみがここにはみられる。

柳田は、離島教育では、島からの離脱を志向して受験や就職に直結する内容を柱とする教育が進行されることで、地域文化の継承が軽んぜられ、教育指導では精神面の強調へ傾斜しがちであるとの指摘をしている。

確かに、上記ウについては、その傾向がみられるかも知れない。しかし情報化が進んだ中にあっては、与那国に限定されることではなく、都市・農漁村地域を問わず全国的にみられる社会的な現象であろう。そして何よりも、子ども世代に地域特有の生業を伝えたいとする大人世代の保護者や地域の住民が抱く意識と、深く関連するものではないだろうか。

二つ目のオについても、その傾向が強くみられる。その背景に、高校が島内にないため、子ども達は中学卒業後に、島を離れ石垣島や沖縄本島の高校に進学する点があげられる。そればかりか多くは家族と離れて寮や下宿などで一人暮らしをする。親の仕送りの負担は大きく、就職先が少ない等の問題から島に戻る若者は少ない。この島には「15の旅立ち」という言葉がある。いやでも自立を強いられるのである。「自立」がキーワードになる。離島する時期までに、

あらゆる教育場面で一人一人が鍛えられることになる。

これらの中でも精神性の高揚について、注目すべきものがある。久部良中には、「教育目標」や「めざす生徒像」に関連するものとして、別に「行動指針」がある。そこでは与那国島出身の軍人、大桝松市大尉の遺訓が採り上げられている。

> うらぶの高きを思うなかれ　　大空の限りなきを知れ
> 島の小さきを憂うるなかれ　　太平洋の広きを見よ

この「うらぶ」とは、島内最高峰の宇良部岳（標高231m）のことである。何よりも言葉は、小さな島の規模に目を向けるのではなく、地球や世界に目を開けようという意味を端的に表現している。

大枡大尉は、与那国の中心地にあたる祖納集落の出身で、1942（昭和17）年のガダルカナル島の戦いで武勲をたてた後に戦死し、当時“軍神”とあがめられた人物である。現在の中学校の行動指針に軍人の言葉を大切にあげている例は、戦争や軍隊に特に複雑な感情を有する沖縄県にあってめずらしいことではないだろうか。国土の端に位置し厳しい環境下で生活を営んでいる地域にとれば、大尉が時の軍や政府が推進した軍国主義教育に名前を利用されたという経緯があっても、郷土の出身で全国的に名を馳せた人物であり、自然と彼の残した言葉に注目することになる。絶海に臨む与那国の地に立てば、言葉を発した人物が軍人であろうとなかろうと、時代が変わろうとも、この言葉のもつ意味に揺るぎないものを感じることができる。

沖縄本島からでも500km離れている孤島が置かれた状況とは全く異なる地域で育つ教育関係者や生徒にとれば、ここにみられる精神性の強調には若干の違和感があるかも知れない。しかしそれだけに、与那国の置かれている社会的環境の厳しさが感じられるのである。

5　久部良中学校の地域学習

(1)　課題解決に取り組む地域学習

久部良中学校で実践されている離島教育において、社会科に関わる地域学習は、総合的な学習の時間で実施される「久中プロジェクト」の内容と深く関わる。

久中プロジェクトでは以下の目標の達成が図られている。

- 地域を様々な視点から捉え、人やものとの出会いを通して、自ら課題を設定し、追求する資質と能力を育て、その課題の解決に主体的、創造的に取り組もうとする態度を育てる。
- ふるさとに誇りを持ち、自他共に学び合い、伝え合おうとするコミュニケーションの能力を育成し、そのことを通して様々な視点から自己の生き方を考えようとする態度を育てる。

そして『久中プロジェクト2010』では、「学び方や生き方」「自ら学び、自ら考える力」の育

成を目指し、日本最西端の地理的条件や地域の自然・歴史・文化の地域素材を積極的に活用した郷土学習を中心に捉え、社会体験や体験的学習を推進する、と学習のねらいが説明されている。ここでは先の例にあげたように、台湾についての調べ学習を行い、最終的には台湾におけるホームステイに結びつけるという課題解決的な学習の典型がみられるのである。

例として、年間10時間程度設定されている産業体験における農園活動をみてみよう。

農園活動では、長命草（ボタンボウフウ）の栽培を体験する。与那国では慢性的に塩風害がみられ、栽培できる作物が限定されている。この中にあって、長命草は、紫外線や海風がきわめて強い海岸や断崖にでも自生する野草として注目されている。ポリフェノール成分が豊富なセリ科の植物で、島では古くから滋養強壮、高血圧・動脈硬化抑制などの効果があるといわれ、薬膳料理などとして用いられてきた。

同草の栽培については、2005（平成17）年３月の同町「与那国・自立へのビジョン」の中で、地域資源活用型産業育成事業の一つとして取り上げられ、行政・民間が一体となって長命草産地協議会を結成した。その下で、以前から健康食品として同草に注目していたＳ氏が、23名の生産者と契約して栽培を行っている。現在約７haの畑で１ヶ月当たり約20トンが生産され、島内で洗浄・チップ化された後に本土に送られる。本土の企業により二次加工され、ジュースや菓子などの原料にされている。中学校の敷地でもこの長命草が生徒の手により栽培されており、教育活動費の一端をまかなっている。いっぽう島内の畑地は452haあり、多くがサトウキビ栽培である。長命草の栽培振興には、需要の拡大や栽培技術の普及など、克服すべき課題は多い。

生徒達は、農園に出向いて植物としての長命草の特性や栽培技術の工夫を学ぶ中で、その背景に与那国が置かれている自然条件の特性に触れる。与那国において新たな産業振興が今求められている社会的情勢、商品作物の栽培が、市場から大きく隔てられた離島における地域経済に果たしている役割、さらに製品化に至る社会のしくみなどを学ぶ。また、出荷価格を通して経営的な見地から労働コストについても学ぶ。さらに、特産物を生産する労働の意義や職業としての農業についても触れる機会を得る。

学習内容は地域の産業や労働を学ぶことであり、学習方法は体験的学習というより経験主義的色彩が強く、自校敷地内での栽培活動は問題解決学習的なものである。そして学習の協力者は地域の住民である。地元の漁協に協力を依頼する洋上体験でも同様であろう。地域の産業を教材化する過程で、体験を通して地域の生業を直接学び、地域の住民の協力を得ることで地域の一員としての自覚を共有し感謝の気持ちを持つことをめざしている。これらは、総合的な学習の時間に行われるのであるが、学習内容には社会科の領域に含まれるものが多くみられる。経験を通して地域の生活課題を直視しつつ学ぶという、初期社会科の実践に類似した学習がここにみられる。

(2) 離島与那国の地域学習

離島における地域学習についての考え方は、長崎県対馬の例ですでに報告してきた通りである。ここでは与那国と対馬との比較から、離島の事情によって異なる地域学習の内容を、二つの側面から考察してみたい。

先に、離島には自然的要因と社会的要因に深く関わる環海性と隔絶性という特徴がみられ、

これが厳しい環境下での生活を強いる原因となっていると述べた。これら両島では、恒常的な人口減少に悩んでいる。例えば、与那国町と対馬市の現況を人口で比較すれば次のようになる。

与那国：2011年１月１日現在で 1,614人（与那国町調べ）、1980年から25年間で約15.2%減
対　馬：2011年３月末現在で　34,905人（対馬市調べ）、1980年から25年間で約24.3%減

両島とも、人口減少のみならず産業の停滞も見逃せない。共に第一次産業の比率が高いが、中でも漁業従事者の減少が続いている。

また、環海性と隔絶性の大きな要因を占めるのは、地域経済や社会生活の中心地と島との距離である。これを、一般物資や大量の旅客を運送するフェリーの所要時間から計ってみよう。

対馬厳原 ←（４時間50分）→ 福岡
与那国島 ←（４時間）→ 石垣島／石垣島 ←（10時間30分）→ 那覇

与那国の場合、日常生活上の中心地は石垣市である。対馬は県庁所在地の長崎市ではなく近隣県の福岡市である。この点では対馬も与那国も時間的距離に大きな差はない。両島で異なるのは、島民の子弟の就職先や進学先を考慮した場合、福岡市や那覇市という県庁所在地クラスの大都会との間に存在する距離感である。両島を比較した場合、与那国の置かれている絶対的距離には、計り知れない条件の悪さを感じざるを得ない。

もう一つの側面に島の振興策との関わりがある。与那国・対馬の相似点は、共に、国土の最も端にあたる地であり、しかも、他国の国土が肉眼で確認できる島なのである。いわゆる国境の島であるということである。

このうち対馬は、現在の島の振興策として、隣国大韓民国との交流を最大のテーマにしている。日常生活上の文化の相違から発する摩擦を抱えつつも、韓国からフェリーで続々と来島する観光客を迎えている[17]。対馬は、古代以来日本と韓国とを結びつける役目を果たしてきたばかりでなく、比較的順調な日韓両国関係の下にあって、現在も交流事業や観光客受入を通して島の振興を図っている。このように対馬では交流に基づく将来の活性化に大きな期待が寄せられている。

いっぽう、与那国は、台湾との直接往来を目指しているが、先述したように、期待した事業は順調には進んでいない。障壁は、交流の歴史の違いや政府出先機関の未整備だけではない。与那国は台湾との国境に隣接するが故に、時々刻々と変化する中国やアメリカとの関係に敏感に影響される日台外交の狭間に置かれ、交流に関わる一つひとつの課題の解決を国に委ねざるをえない。国際交流については一自治体が自らの意思で施策を打つことは難しいのである。

対馬は大陸とのいわば橋渡しの位置にあるのに対して、与那国は日本の領域の最西端にあり、いやでも外国の政権と対峙せざるを得ない。与那国では、対馬のように隣国に積極的に働きかけをすることで生活が営めるのではなく、国土の最果てにあって、はるか遠く北東方面に位置する国土の中央をひたすら志向する生活を考えなくてならないのである。

中学校における地域学習も、こうした背景の影響を受けている。対馬では、韓国の中学校との相互訪問を基に行ってきた歴史があり、地域での国際交流行事にも積極的に関わっており、そのための準備を含めた地域学習がみられる。島に関わる学習と共に、隣国の理解を深め、交流事業に参画する人材を育成する教育が、島内の高校と共に一貫して行われている。

与那国町ではこれまで中学生による台湾でのホームステイを実施してきた。島内のもう一つの与那国中学校では、2010年冬に初めて台湾方面への修学旅行を実施した[18]。しかし、現時点

では台湾からの中学生の訪問はみられない。先にあげた2007年度の久中プロジェクトの取組では、台湾・花蓮市との交流を通して郷土の自然・文化・産業を知ろうという内容がみられた。グループごとの調べ学習やインターネットでの交流を基に台湾の文化、自然、産業について調べ、郷土与那国と比較することによって郷土をより深く理解するというものであった。これは、地域の特色を生かした地域学習が含まれているものとして捉えることができる。しかし、台湾のことを知る学習内容は設定しても、将来の交流事業の拡大を目途とした教育はなしえていない。相互理解には至らず、わが国からみる隣国理解に終始している。対馬においては隣国との歴史的関係も含めた地域学習がみられるのに対して、この点で相違がみられる。

さらに本論では、これまで同中学校の実践において「郷土」という用語の付いた内容を紹介してきた。例えば4(2)アでは「豊かな郷土を愛し、世界へ羽ばたく生徒」をあげた。久中プロジェクトでも「郷土学習」という文言が使用されている。学習指導要領からみると、社会科においては1968（昭和43）年版以前まで「郷土」の文言が使用されていたが、それ以降は「身近な地域」という用語に代えられている。

学校の教育目標や総合的な学習の時間の内容と、一教科としての社会科の学習内容の違いはあろうが、ここではあえて「郷土」の文言にこだわる使用がなされているとみる。そこには、自分たちの育った与那国を大切にする意識を養いたいという強い意図があり、単純に生活空間的広がりをイメージさせる「身近な地域」という文言よりも、体験や心情面からふるさとをイメージさせる「郷土」という文言を使用する理由が読み取れる。

さらに地域学習を行うにあたり、対馬では「身近な地域」の学習とよぶのに対し、与那国では「郷土学習」と称して実践を行っている。ここで久部良中学校の教育計画で、「郷土学習」の大切さをうたっている一節があるのであげておこう。

> なぜ「郷土学習」か
>
> 本校の生徒は、高校進学のためにほぼ全員が島を離れる。また、その後の大学進学や就職で世界中の様々な地域に巣立っているという現状がある。こうした課題を踏まえ、中学生が人生における原点としての郷土を学ぶことで、アイデンティティを確立することが、生きる力につながっていくと考えられる。

対馬をはじめ多くの離島で求められるのは島に残るための教育であり、島振興を主眼においた教育である。対馬なら、行政が進める国際交流事業に理解を示し、それに参加する姿勢の育成を行う。しかし、与那国では、島育ちというアイデンティティの確立が主眼とある。ここでは必ずしも島に残ることを求めていない。加えて必要な要素は子ども自身の自立心の涵養なのである。与那国における地域学習では、他の離島と同様に、地域で学ぶことより地域を学ぶことに傾斜することは当然であるにしても、ふるさとに対するアイデンティティ育成という色づけがさらに濃くなっているのである。

6　おわりに

本論では、沖縄県の離島“与那国”における離島教育と地域学習についてみてきた。与那国

は、日本最西端の島として注目を集め、年間３万人超の観光客[19]が訪問する比較的有名な離島である。与那国以外にも、さらに厳しい状況下にあって、注目されない離島が数多く存在することは事実であろう。離島それぞれの教育の課題は、与那国と対馬との比較で明らかになったように、一様とはいえない。自然的環境や社会的環境により違いが存在する。また、国境に臨む与那国のように、国際情勢の動きにより島が抱える課題に変化が起きるところも出てこよう。

離島には、本土の経済・社会動向の負の部分が増幅されていくという環境がみられる。とりわけ、離島と近隣の社会生活上の中心地との距離は、生活条件の厳しさに何倍にものしかかる係数となる。このような中で、離島における教育実践は、全国に展開されている教育の方向性と大きな関わりを持ちつつ、独自の環境の下での展開が求められている。そこでは離島であるが故に、教育の環境面や人材面で不利な条件に置かれてしまう現実がある。

本論でみたように、離島では、地域学習の実践面でもいわば極限の姿が展開されることになる。そこにわが国の社会科教育の一つの典型をみることができるのである。

[注]

1） 今野喜清・新井郁男・児島邦宏編「新版　学校教育辞典」教育出版（2003）
2） 岩田貢「離島地域の中学校における地域学習の現状　――長崎県対馬市を事例として――」龍谷紀要　第31巻第１号（2009）、p. 167～180
3） 国土交通省ウェブページ「離島振興」http://www.mlit.go.jp/crd/chirit/
4） 日本地誌研究所編「地理学辞典　改訂版」二宮書店（1989）
5） 柳田泰典「離島における地域教育構造の現状と課題」、佐伯重幸・猪山勝利編『地域教育研究叢書Ⅰ　現代離島教育の構造と展開――長崎県上五島地区を中心として――』長崎大学教育学部（1990）所収、p. 39～58
6） 猪山勝利「地域教育の論理と課題」、佐伯重幸・猪山勝利編『地域教育研究叢書Ⅰ　現代離島教育の構造と展開――長崎県上五島地区を中心として――』長崎大学教育学部（1990）所収。p. 15～25
7） 気象庁ウェブページ「気象統計情報、大気・海洋環境観測報告、与那国島特別地域気象観測所」http://www.data.kishou.go.jp/
8） 財団法人都市経済研究所ウェブページ「2007年12月『与那国在花蓮市連絡事務所』活動報告書」http://www.ueri.org/project/
9） 与那国町公表値
10） 岩田貢「変容する地域を捉える　第13回　台湾との交流で自立をめざす――沖縄県与那国町」地理　56巻１号（2011）、p. 66～71
11） 2010年10月８日の漁協組合長への電話での聞き取りによるものである。
12） 与那国町ウェブページ「与那国『国境交流特区提案2006』」http://www.town.yonaguni.okinawa.jp/
13） 久部良中学校の学校情報は、ウェブページ（http://www.yonaguni-kubura.jp/kubuchu/）に詳しい。ウェブページ以外の情報は、2010年２月17日～19日に実施した現地訪問での収集資料に基づく。
14） 前掲６）
15） 小林文人「与那国の集落組織と公民館制度の定着過程――与那国調査覚書（その２）――」、東京・沖縄・東アジア社会教育研究会（TOAFAEC）年報『東アジア社会教育研究』第７号（2002）所収、http://www004.upp.so-net.ne.jp/fumi-k/yonaguni1.htm
16） 前掲５）
17） 岩田貢「変容する地域を捉える　第３回　観光と交流に生きる『対馬』」地理　54巻５号（2009）、p. 90～95
18） 久部良中も、2011年度から台湾への修学旅行が予定されている。
19） 2010年度八重山入域観光客数統計概況（沖縄県八重山事務所平成23年１月27日発表）http://www3.pref.okinawa.jp/site/view/contview.jsp?cateid=50&id=16694&page= 1